

日本におけるカナダ史研究の視点

木村和男のアプローチ

田 中 俊 弘

はじめに

「なぜカナダ史を研究するのか」という問いは、我が国にかぎらず、カナダ以外でこの国の歴史を学ぶ誰もが、しばしば周囲から投げかけられ、自問もしてきたはずである。米国や英国など、いわゆる「大国」が対象であれば、その歴史を研究する意義にはそれほど疑問の余地が生じないようだが、世界史への影響が限られ、日本との関係が必ずしも密接ではない国を扱う歴史研究者は、まず、自らのテーマを「正当化」する作業が必要になる。日本におけるカナダ史研究の第一人者として多くの成果を残し、2007年4月に最後の著書、『北太平洋の発見—毛皮交易とアメリカ太平洋岸の分割』を山川出版社から上梓して、その翌月の5月28日に、長年密かに患ってきた病で他界した木村和男の歴史研究にも、自身がカナダに没頭する意義を考えながら、外国人研究者として、世界史の文脈にカナダ史を位置づける方法を模索してきた側面がある。本稿では、氏の業績を時期とテーマに分けながら整理し、その若干の評価を試みるとともに、氏のカナダ史家としての葛藤を示しながら、中小国研究のあり方について、1つのモデル提示を行う。

1. カナダ研究の入り口

カナダ研究の目的と理由は人それぞれであろうし、留学などでこの国を訪れ、そこで学んだ経験が研究の契機となる場合が大半に違いない。学術的な関心から言えば、他国研究としてカナダを扱う者の多くが、総じて、米国、フランス、英国のいずれかへの問題意識から出発して、その延長線上でこの

国の研究に携わり始めている。⁽¹⁾

その中でも、北緯49度の長い国境線で隣接する米国から、視界を北に広げてカナダに関わる研究者が多い。例えば、『アメリカ例外論』などの著書がある政治社会学者リプセットが、米国では決して勢力となりえない社会主義政党がカナダでは州政権に就くほどの支持を得てきたことに着目した博士論文で、その学生生活をスタートしたように、⁽²⁾ 一見よく似た構造の社会に潜む違いが、研究者の関心を引くのであろう。また、先住民や移民を研究する層が、米国からカナダに視点を移すのも自然な流れである。実際、日系移民研究の専門家も、その多くが加米の国境を超え、あるいは国境の南北を比較しながら成果を蓄積してきた。

同様に、フランス研究者が、人口規模ではパリに次いで世界第二の仏語都市であるモントリオールを擁し、英語圏の海に浮かぶ仏語の孤島のような立場に置かれ、独立や言語と文化の存続が大きなテーマとなっているケベックに関心を広げることも自然であろう。2008年10月には「日本ケベック学会」が新設されたが、カナダ国内の地域研究の対象として、ケベックの重要性は高い。

それに対して、イギリスとその帝国から出発してカナダに目を向ける研究者は、歴史家の一部に限られる。しかも、今日のカナダにおいてはあまり顧みられなくなった「オールド・ファッション」のアプローチである。⁽³⁾ しかし、日本のカナダ史研究では、英国から視野を広げてカナダに取り組んでいる場合が今でも比較的多く、木村もその代表的な研究者であった。それは、英国とその帝国が世界史に与えた影響の一端としてカナダ史を捉えようとする姿勢であり、外国人のカナダ研究への動機付けとしては不自然ではあるまい。ただし、英帝国史研究は、支配者英国と被支配地域との主従関係・従属状況に着目しがちであり、被支配国とはいえインドなどに比べれば遥かに穏健な統治を受け、早くから自治も認められてきたカナダのような白人自治領^{ドミニオン}は、決して主たるテーマ関心とはならなかった。

その意味で、周辺的な関心しか持たれなかったカナダのような「恵まれた」植民地の研究を土台にしながら、木村が英帝国史研究でも重要な役割を果たすようになったのは、⁽⁴⁾ 支配と被支配を超えた分析視点が評価されたからであり、また、後に述べるとおり、氏がカナダ研究にのめり込みながらも英帝国史家としてのスタンスを守り続けたからであった。

2. 「木村史学」の出発点

木村和男は、1947年に北海道小樽市に生まれ、地元の小樽商科大学にて井上巽の下で西洋史を学んだ。そして、東北大学大学院に進み、吉岡昭彦に師事した。いわゆる「大塚史学」の流れを汲み、日本の英国経済史研究の大本流で学んできた歴史家である。⁽⁵⁾ 英帝国の枠組みを視野に入れながら投資や帝国通商同盟、そして関税という切り口からカナダ研究に取り組み始めたのは、井上・吉岡の門下生としては当然のアプローチだったのであろう。

木村は、「北海道の小樽で生まれ育ったことが、『北の植民地』カナダに親近感を抱かせる一因だったかもしれない...。...僕自身が間違いなく『植民地人』だったのだ」⁽⁶⁾ と回想し、「植民地」北海道での英帝国史との出会いが生涯の研究テーマを決定したと説明している。カナダ研究を始めて四半世紀経ってからの「記憶」が、学部生だった当時の氏の心情をどれほど正確に反映しているかはともかく、卒業論文で英国の対カナダ投資を扱って以来、木村は常にこの北国に関心を向け続けた。⁽⁷⁾

東北大学の助手を経て秋田大学に移った木村は、その頃から精力的に研究をおこない、多くの業績を発表した。『史学雑誌』の「回顧と展望」では、1977年に、氏の論文「大不況期のイギリス帝国連合運動と植民地」が前年の英国史研究の重要な業績の1つとして紹介された。「帝国連合運動に果たしたカナダの役割は諸植民地の中で最も大きく、その点で、従来の研究に新たな知見を加えた」との評価の後には、「本国における運動の分裂と挫折があたかもカナダの動きのみによって規定された感があり、『カナダ・ナショナリズム』の観点が余りに強すぎるように思われる」と、やや批判的なコメントも続くが、むしろそれは、執筆者の吉岡昭彦による教え子へのエールだったに相違ない。⁽⁸⁾

その3年後の「回顧と展望」には、福井憲彦が、木村の「1894年植民地会議（オタワ会議）における帝国通商同盟論争とイギリス政府」を取り上げ、この論争で見られた「植民地ナショナリズム」が、「将来のイギリス帝国瓦解と連邦制への移行にとって先駆的意義をもつものであることを示す」と評価している。⁽⁹⁾

これら初期の研究の主題は、後に再び重要な成果へとつながっていく。と言うよりも、英帝国の再編こそが、木村が植民地を扱いながらもその底流で

一貫して持ち続けていたテーマであった。この時期には、カナダ自体よりも英帝国の経済体制や帝国瓦解への関心を向けていた木村が、その問題意識を維持したまま、カナダ史家へと転身したのである。

3. 英帝国史からカナダ史へ

木村の視点の中心は、その後、英帝国からカナダ自体にシフトした。しかし、彼の視野がカナダに限定されたのではなく、むしろ英国に加えて米国にまで広がったとみなすべきである。1983年の『史学雑誌』の「回顧と展望」で、新川健三郎が、「(木村は、)カナダ史研究が持つ意義の1つとして、被支配国の視点から英米両帝国主義政策それぞれの特徴を分析し、両者のコントラストを検出する点」をあげていると説明しているが、⁽¹⁰⁾ まさにそれぞれが、英国経済史研究の本流から出発し、帝国主義の時代に焦点を当ててきた木村の歴史研究の特徴であった。

木村は『北太平洋の発見』のあとがきで、自らの業績を3期に分けて、次のように記している。

そもそも私は、19世紀中葉から第一次世界大戦までを対象に(1)「連邦結成期のカナダ国家形成史」をテーマとして細々とカナダ史研究を始めた。続いて両世界大戦間期におけるイギリス帝国史での(2)「帝国＝コモンウェルス体制の形成におけるカナダの役割」を検討した。ここ数年は北米を中心とした(3)「毛皮交易の世界史」を描こうとしている。⁽¹¹⁾

前項で取り上げた「大不況期」などの論文は、後にこの2つ目のカテゴリーの研究の直接的な土台となるが、それらはカナダよりも帝国史に軸足を置いた研究業績であり、その後のカナダ自治領の生成過程（連邦結成）を扱った諸論文こそが、そのカナダ史研究の出発点であった。

後に、『カナダ自治領の生成（以下、生成）』にまとめられた1979年から1987年にかけての論文は、カナダ人研究者（主に経済史家）の論考や同植民地の一次史料にも依拠しながら、しかし米国と併せて英国の一次史料や英帝国史研究者の先行研究を土台にしていた。⁽¹²⁾ これは、3つの国の歴史に同時に取り組もうとする並々ならぬ努力と意欲の結晶だが、カナダ研究の素材が限られていた時代の制約を、英米の史料に頼ることで克服したともみなせ

るだろう。それは、日本におけるカナダ研究のもう1人の先駆者である大原祐子が、米国南部史を出発点として、米国研究の視点や問題意識を持ち込みつつ、3年間のカナダ留学での経験と入手史料を軸にして、主にカナダの文献と史料に依拠したのとは対照的である。⁽¹³⁾

大原にもカナダと英国の関係を扱った重要な論考がいくつもあるが、基本的には、北米研究者の視点から、カナダ国内の史料を最も重視しながらこの国を分析してきた。一方の木村は、カナダの史料も多用し、もちろん米国も重要な対象として視野に入れるが、むしろ英国側の史料に重きを置き、米国は英帝国の北米政策のカウンターパートとして扱った。それが木村と大原の大きな違いであった。

そうした差異は、連邦結成の分析において特に顕著である。連邦結成とは、北米のいくつかの英領植民地が1867年に合同し、英領北米法を憲法として、自治領カナダとしての歩みを始めた、カナダ史上でも特に重要な出来事であるが、木村の目には、それは、外的要因によって英米に決められた運命と映った。『生成』の序に記されているとおり、「カナダの発展は、国内での自生的、あるいは自立的要因にもまして、北米大陸の北半分の領有をめぐる英米両帝国からの『外圧』、ないし両帝国間の相克により規定されざるをえなかった」し、「決定的被規定性」こそが連邦結成の本質であった。⁽¹⁴⁾

専門書として編まれた『生成』を補完する目的を持たせながら、より一般的な読者を対象に執筆した『連邦結成—カナダの試練』のプロローグとあとがきには、木村自身が自らの研究方法を説明している下りがあり、この時期の木村の関心のあり方が前著よりも平易に示されている。すなわち、連邦結成は、英国と米国の2つの帝国の対立と妥協の産物であり、木村からすれば、「カナダの誕生は、地域的、民族的、帝國的な三重の対立を妥協させることにより、北米大陸におけるイギリス植民地カナダの生存を確保しようとした壮大な実験」だったのである。⁽¹⁵⁾

木村が提示した視角は、イギリス史を起点にした外国人（非カナダ人）研究者に独特であろう。歴史学は、各国のナショナリズムとも結びつきながら発展するため、自国史としてのカナダ史研究では、このような視点は出てきにくいからである。とはいえ、そのアプローチ自体は外国人特有でも、前提となる問題意識は、カナダの史学界における「地殻変動」にも大きな影響を受けていた。

1970年代は歴史学に世界的な転機が訪れた時代である。カナダでも「(カナダは)その地理にもかかわらずではなく、その地理ゆえに出現した」という歴史家イニスの言葉に代表されるナショナリズム色の強い「ローレンシアン学派」とその分派が、長い間、歴史学の主流にあったが、ちょうどその当時、新世代の歴史家からの挑戦を受けていた。⁽¹⁶⁾

木村は、そのようなカナダの研究潮流の中に自らを置き、同学派に対峙する立場をとった。カナダ史における自立的要因や内的要因を重視する「ローレンシアン学派」を批判する研究者群は、彼にとって援軍であった。1977年12月11日に国際文化会館（六本木）で開催された第1回日本カナダ研究会（日本カナダ学会の前身）において、「最近のカナダ経済史研究の動向について」と題する発表を行い、その内容に加筆修正した論文を2年後の『カナダ研究年報』創刊号に掲載したのも、⁽¹⁷⁾新しい潮流に自らを位置づけようとする試みであった。また、そこでの問いかけは、『生成』以来の一貫した関心と問題意識、すなわち、カナダ史における外的要因の重要性という視点から発せられたのである。木村は、そのような新しい歴史学の流れに、外国人の視点から加わろうと意図したのだ。

彼の先駆的な研究は、日本国内で様々な批評を得た。『生成』の序で木村は、当時の論考がカナダ史の専門家からは、『外圧』をあまりに強調する悪しき『帝国主義的解釈』に陥っている」と指摘される一方で、英国史や米国史の専門家からはカナダの影響を「過大評価する『植民地的ナショナリズム的解釈』に偏重している」旨を批判されていると述べ、そうした相反する評価を受けることが植民地史研究の特殊性だと説明している。⁽¹⁸⁾それは、植民地と本国の関係についての新しいアプローチを提示した木村だからこそぶつかった壁だった。

4. カナダ史への傾倒

木村のカナダ史への学術的アプローチは、『生成』の頃から常にほぼ不変だったが、研究の進展やカナダ人研究者との交流の広がりと共に、この国への傾倒を増していった。日本カナダ学会の創成期から、数少ない同国の歴史家として研究してきたために、自らのアプローチとは無関係に、多面的にカナダを理解する必要があったことももちろん影響しているだろうが、特に1993年の1年間をトロントで過ごした文部省在外派遣が、木村のカナダへの関心

と愛着をさらに深めたに違いない。この時の経験は、その2年前の渡加体験とともに、『カナダ歴史紀行』にまとめられているが、⁽¹⁹⁾ そこから、英国と米国とを「逆照射」するべくカナダ研究に取り組んできた木村の、まったく違う側面を知ることができる。アイスホッケーに熱狂し、グレン・グールドの演奏を愛し、ウクライナ系画家ウィリアム・クレークの絵画に魅了されていた私生活についての言及を織り交ぜた気さくな文章で、「専門外の文学、音楽、美術といった分野にも図々しく踏み込んでおり、私的な要素が出すぎた点も自覚しているが、限られた体験と感性をまるごと動員してカナダをとらえようとした」という同書を執筆して以降、木村の仕事はますます多様化した。⁽²⁰⁾

日本におけるカナダ史の第一人者として、自らの研究を積み重ねながら、山川出版社の世界各国史シリーズの『カナダ史』を編むなど、概説史にも数多く関わるとともに、主に筑波大学に客員で迎えたカナダ人歴史家との共同作業で、『カナダの地域と民族 歴史のアプローチ』や『カナダの歴史 大英帝国の忠誠な長女 1713-1982』などの編著作業を進めた。⁽²¹⁾ ウィリアム・L・モートンの『大陸横断国家の誕生 カナダ連邦結成史 1857-1873』(同文館、1995年)の翻訳は、むしろ連邦結成史家としての本流の仕事とみなすことができようし、なかには『多文化主義・多言語主義の現在』(人文書院、1997年)に掲載した論文のように、歴史研究の一論考とはいえ、本来の守備範囲をやや超えた著作もある。また、それらの余技として、『ミュージック・マガジン』(1996年12月号)にカナダ音楽に関する文章を寄せたり、モントリオール交響楽団日本公演プログラム(1996年)に文章を書いたかと思えば、旅行ガイドや赤毛のアンに関する本に原稿を執筆するなど、より多面的な「知カナダ派(Canadianist)」になっていた。

井上巽ら、東北大学吉岡研究室で木村とつながっていた研究者たちが、「糸の切れた凧」のようにイギリスを遠く離れてカナダへと深く入り込んでいく様を心配していたのがこの頃だったようであり、井上は、「僕はカナダ屋ですから…」と斜に構えた木村の言動を回想している。⁽²²⁾ カナダ史の代表的研究者となった当時、その種の仕事が多くなったのは自然の成り行きであったらうし、カナダへの知識や愛着が深まれば、出発点であった英米帝国主義から乖離しても不思議はない。しかし実際には、木村の英帝国史への関心は以前と変わらず、カナダへの深い理解を経て止揚の時を迎え、再び帝国史に

目を向けるようになったのである。

5. 帝国史の逆照射

木村が自らの研究の第二期と分類した「帝国＝コモンウェルス体制の形成におけるカナダの役割」は、先に述べたとおり、連邦結成の研究以前に取り組んだテーマであった。それは、東北大学に提出された1997年の博士論文とそれを土台として2000年に出版された『イギリス帝国連邦運動と自治植民地(以下、帝国連邦運動)』へと至る一連の研究であり、イギリス帝国史研究会のメンバーと共に執筆した『イギリスの歴史 帝国＝コモンウェルスのあゆみ』や『世紀転換期のイギリス帝国』も、この研究群に含まれる。⁽²³⁾

『帝国連邦運動』について、後藤晴美は、「帝国関税同盟について再検討する際に必読となるであろう書物」と評価し、細川道久も、『『一国史』的な視点に陥りがちな昨今のカナダ史研究に一石を投じうる」研究であり、「イギリス帝国史研究への重要な貢献であると同時に、カナダ史研究においても寄与すること大」と評している。⁽²⁴⁾

この研究の出発点となった1976年の帝国連邦運動(この当時は「帝国連合運動」という訳語を用いていた)に関する論考については、先に吉岡の評価を紹介したが、従来は経済史の視点から、「イギリス関税改革運動」ととらえられてきた帝国連邦運動について、木村は植民地の側に立って検証をおこなった。

英国経済史から出発した木村も、そもそもこのテーマに関心を持つに至ったのはその関税改革運動としての特質ゆえであったが、帝国史の視点を維持しながらカナダ史に深く入り込んできた後には、それが全く違った意味を持つことに気づいたのである。具体的に言えば、運動がその名称のとおり、「あくまでも本国を中核とした自治植民地との政治同盟、字義通りのフェデレーションを究極目標としていた」点であり、運動の失敗が帝国からコモンウェルスへの再編までの道筋を作った点である。⁽²⁵⁾ 木村の目には、関税改革運動としての側面を強調しすぎるのも、運動自体を過大視するのも間違いだと映った。むしろ彼の考えでは、関税運動としてよりも政治運動としての側面を重視すべきであったし、「帝国連邦運動の歴史的意義は、その目標を達しえずに解体したことで帝国連邦の被現実性を証明し、英国に植民地ナショナリズムの容認を迫り、これを前提とした英領コモンウェルス成立を導いた事実

に求めるべき」であった。⁽²⁶⁾

細川は、「イギリス帝国連邦運動の意義をネガティブにとらえ、それが逆説的ながらも『帝国＝コモンウェルス体制』を導く要因となったとする、いささか『搦め手』からの論証が禁欲的」であり、『生成』の衝撃的なアプローチと比べれば、「静なるプロヴォカディヴネス」を感じた旨を述べているが、⁽²⁷⁾ そのような主題の「おとなしさ」も、そして、イギリスやカナダに限らず、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカなどについても多くの一次資料にあたった実証性の高い研究成果を、文章を削って比較的薄い1冊にまとめた姿勢も、確かに「禁欲的」との印象を受ける。おそらく、その後の時代まで扱った研究が続けて出されていけば、その一連の研究の中で、『帝国連邦運動』の持つ意味がより明確になったはずである。

同書のあとがきには、「本書で提示したテーマを真に意味あるものとするには、当然、本国の帝国連邦論〔帝国主義〕と植民地ナショナリズムとの相克を1931年までフォローしなくてはならない」⁽²⁸⁾と結ばれているが、木村の手でその作業が進められることはなかった。⁽²⁹⁾ 氏の関心は、毛皮交易という新しいテーマに移り、帝国連邦運動とその後の帝国再編過程を検証する仕事は後進に委ねられた。

6. 世界史での位置づけを求めて

帝国連邦運動に関する論考をまとめた後、木村は自身が第3のテーマと位置づけた毛皮交易の世界史に移行した。今度はカナダ史を世界史の中に置こうとする大きなテーマであるが、その関心は、1993年のカナダ滞在中に既に芽生えていたに違いない。西部にルイ・リエルの足跡をたどるうちに、白人毛皮交易人と先住民の混血の子孫であるメイティ(メティス)への関心が強くなり、そこから毛皮交易に視野を広げていく様子が、『カナダ歴史紀行』からも読み取ることができる。ウィニペグの「人間と自然博物館」では、「(カナダ西部が)まず毛皮帝国としてヨーロッパ列強の関心の的となった事実を再認識」させられているが、⁽³⁰⁾ このような体験が、木村の第3期の研究テーマの原点にあった。

研究の実質上の出発点は、『歴史と地理』539号に寄せた「毛皮交易から生まれた『新しい民族』 カナダの混血先住民メイティの誕生」(2000年11月)であった。その冒頭を読めば、木村がメイティに関心を持った理由が分

かる。すなわち、「G8メンバー中でカナダだけが、他国を侵略・略奪した過去を持たぬ唯一の国」という点がその美德であり、たしかに、「先住民を暴力的に駆逐して大陸の支配者となったのは、北米、中南米を問わずヨーロッパ人の『原罪』であり、カナダも残念ながら例外ではありえない」が、「カナダ西部では毛皮交易を背景として、短期間ながら、例外的なほど美しいインディアン＝白人間の家族関係が成立」した事実、木村は新大陸における例外的で特殊カナダ的な光景を見いだしたのだ。⁽³¹⁾

ただし、「カナダ的個性に満ちた毛皮交易とメイティの世界に、いずれ本腰を入れて取り組んでみたい」と稿を結んだこの段階から、その後の壮大な構想が芽生えていたわけではあるまい。⁽³²⁾ その後、『カヌーとビーヴァーの帝国 カナダの毛皮交易』(山川出版社〔historia〕、2002年)、『毛皮が創る世界 ハドソン湾からユーラシアへ』(岩波書店〔世界歴史選書〕、2004年)そして『北太平洋の「発見」 毛皮交易とアメリカ太平洋岸の分割』(山川出版社、2007年)の「毛皮3部作」へと研究を積み上げていく中で、より大きな研究領域に自らを置くことになったのである。

「3部作」と書いたが、この3冊は書かれた目的も扱う領域もそれぞれ異なる。『カヌーとビーヴァーの帝国』は、きわめて本格的な研究書としての内容を含んでいるものの、主に初学者を対象として、筆者自身の体験談なども入れながら平易な文章で書かれた。かつて筑波大学客員教授だったダグ・マツカラと一緒にカヌーで遊び、語らうエピソードから始まり、本文中にも、ビーヴァーの毛皮を入手した挿話や、メイティ作家マリア・キャンブルとの懇談の様子と写真が挟まれており、さながら「テーマを毛皮とメイティに絞った『カナダ歴史紀行』」の様相である。カナダ研究者として先住民は避けておれないと心に決め、はじめて「先住民史、社会史、女性史ともオーヴァーラップする」⁽³³⁾ テーマに取り組んだ同書の執筆が、「北回りの世界史」を扱う次の研究につながった。

続く『毛皮交易が創る世界』は、スケールの大きな実験的な1冊であり、あとがきの木村自身の説明が、その趣旨の簡潔な解説になっている。

(香料、砂糖、タバコ、銀などの南方物産に比べ、)北米を主産地とするビーヴァーやラッコの毛皮の流れは、量的にずっとか細く、時代的にもずっと短命だった。それにもかかわらず、ヨーロッパ、カナダ、アラスカ、

ロシア、ハワイ、中国へと延びた「毛皮交易が創る世界」は、毛皮獣が乱獲で枯渇するまでに、英米仏露の諸列強による北米大陸、シベリア、ハワイなどの領土分割を事実上完了させている。この事実からだけでも、毛皮交易の世界史的意義をもう一度見直すべきではないか。⁽³⁴⁾

木村は、毛皮交易とメイティの研究という出発点から、このような大きな問題に意識を移して、同書を書き上げた。ビーヴァーと、後にはラッコの毛皮を扱った、主にハドソン湾会社の研究であるが、その内容はカナダの枠にとどまらず、カナダを中心とした世界史研究となった。

さらに、木村の最後の著作となった『北太平洋の「発見」』は、もはやカナダ史家の範疇を完全に超越し、「世界史」の研究書として執筆された。日本人研究者に太平洋の歴史が驚くほど無視されてきたとして、増田義郎は2004年に『太平洋 開かれた海の歴史』(集英社新書)を刊行したが、せっかくの新しい切り口にもかかわらず、同書が「北太平洋」を軽視している点を木村は指摘し、その欠落の補完を意図して、ラッコ毛皮の交易に焦点を当てたのだ。言語能力上の限界を感じながら、あえてロシア、スペイン、フランスなどの北太平洋進出の動きもとらえ、欧米の歴史研究者にも最近になってその重要性(アメリカ大陸における欧米列強の領土領有原則を大きく転換させた点⁽³⁵⁾)が見直されつつある1798年の「ヌートカ湾事件」の意義についても論じている。

残念ながら、木村が本当に描きたかったであろう「ヌートカ湾協定」後については、終章で簡潔に述べられているのみだが、「イギリスとスペインとの対立から『漁夫の利』を得たのはアメリカ商人」で、彼らが「北西海岸、広東、ボストンを回る世界一周の『ゴールデン・ラウンド』ルートを完成させた」し、その利潤がニューイングランドの工業化のための資本に転嫁されたという指摘は重要である。⁽³⁶⁾ その他、中国や日本の「開港」に先鞭をつけたのも、究極的にはハワイがアメリカに併合されるプロセスの遠因となったのも、毛皮交易だったという指摘も、さらなる分析と実証が待たれる興味深い議論である。

「帝国連邦運動」以降の帝国 = コモンウェルス再編というテーマと同様に、木村はここでも非常に魅力的な問いを提示して、研究の深化を後に託した。それは、「西洋史」、「東洋史」、「日本史」の重なり合う領域であり、多数の言

語史料を土台とした研究のためには、むしろ個人ではなく複数の研究者集団が扱うべき主題かもしれない。木村はそのような壮大なテーマに果敢に先鞭をつけたのである。

むすび

木村和男の一連の研究を振り返れば、そこに1人の植民地史研究者が葛藤してきた歴史を見いだすことができる。大国研究の一手法として中小国(植民地)研究を開始し、中小国研究への没頭の時期を経て、研究対象国の世界史への位置づけを目指したその研究姿勢と成果は、容易に真似できるわけではないが、中小国や植民地研究に関わる我々に対して、1つのモデルを提示してくれている。そこで重要なのは、一国史に陥らない国際的な視野の必要性であり、同時に対象国への広く深い理解であり、その後の大きな展開を睨んだ研究テーマの選び方であろう。

木村の研究姿勢と植民地研究に取り組む気概は、初期の論文にはっきりと表明されていた。

(前略)我々日本人がカナダ史研究において客観的貢献をなす一方向は、かかる国際的視野に立つこと、即ちわが国で豊かな研究的蓄積を持つイギリス史、アメリカ史等の研究成果を、カナダ史と密接に結合させることに求められるであろう。そうすることによって我々のカナダ史研究は、単に従来空白であった地域の穴埋めではなく、我々の世界認識を一層深く豊富にするものであることを、積極的に立証できるのではないか。⁽³⁷⁾

このような姿勢を、木村は終生貫いたと言えよう。

外国史に関わる研究者は、対象国からの距離や言語の壁を弱点として意識しながら、外国人としての視点を自らの特長とするべきであるが、中小国の研究者は、さらに他国(大国)の理解を加えてその強みとする必要があるかもしれない。木村のアプローチは、カナダ史の畑を耕す外国人研究者として、我々が見習うべき姿勢を提示しているのである。

注

木村和男先生は筑波大学大学院地域研究研究科および同大学院歴史・人類学研究科に在籍した当時以来、長年師事した筆者の恩師である。2008年5月18日、一周忌を前に、井上巽先生(小樽商科大学、二松学舎大学OB)のお声かけで、東北大学、筑波大学、そして日本カナダ学会の会員を中心に、故人と特に親しかった方々に加え、夫人と2人のお子さんにもご臨席いただき、市ヶ谷にてしめやかに偲ぶ会を開催した。その際、追悼文集(*The Memoirs of Kazuo Kimura*)を編集させていただいたが、本稿をまとめるにあたり、この文集に寄稿された追悼文も参照した。日本のカナダ史研究の開拓者の1人だった先生の業績は、今後も後続の研究者に参照され続けていくであろう。本稿は、先生の手をおそらく一番長く煩わせた不肖の教え子による、ささやかなオマージュである。

- (1) 日本のカナダ研究者がこの国に関わるようになった契機については、かつて筑波大学客員教授だったテイラー(Brook Taylor)が2002年から調査を進めて、2004年10月16日にカナダ日本学会(JSAC)の年次大会(於ヴィクトリア大学)で発表し、翌年日本カナダ学会研究年報に掲載した論考“Canadian Studies in Japan Today”(『カナダ研究年報』第25号、2005年)が参考になる。同年報の加藤普章「日本におけるカナダ研究の現状と課題—日本カナダ学会創設25周年を迎えて」も併せて参照のこと。
- (2) Seymour Martin Lipset, *American Exceptionalism: a double-edged sword* (N.Y.: W.W. Norton, 1996). 邦語訳『アメリカ例外論: 日欧とも異質な超大国の論理とは』は1999年に明石書店から発行。リップセットがコロンビア大学に提出した博士論文は、以下のタイトルで刊行されている。*Agrarian Socialism* (Berkeley, CA: University of California Press, 1950).
- (3) カナダ史学会の元会長バックナーら少数の研究者が細々と続けている領域ではある。最近の研究としては、Philip Buckner, ed., *Canada and the End of Empire* (Vancouver: UBC Press, 2005), Buckner and Douglas Francis, eds., *Canada and the British World: Culture, Migration, and Identity* (Vancouver: UBC Press, 2007)などがある。
- (4) イギリス帝国史研究会の創成期からのメンバーであり、同研究会が中心

になって編んだ『イギリスの歴史 帝国=コモンウェルスのあゆみ』(川北稔・木畑洋一編、有斐閣、2000年)で1章(帝国の変容を扱った第4章)を担当した他、5巻組の「イギリス帝国と20世紀」シリーズでは第2巻の編著者を務めた(『世紀転換期のイギリス帝国』[ミネルヴァ書房、2004年])。

- (5) 『インドとイギリス』(岩波書店、1975年)などの著書で知られる吉岡は、『近代イギリス史の再検討』(柴田三千雄・松浦高嶺編、御茶の水書房、1972年)などでも「大塚史学」を越智武臣ら「再検討派」から擁護し続けた。
- (6) 木村『カナダ歴史紀行』(筑摩書房、1995年)あとがき(p.276)より引用。
- (7) 追悼文集(2008年、未刊行)に掲載された井上巽の文章を参照した。木村の卒論のあとがきには、その論文を研究の「0マイル起点」にする決意が述べられていたという。
- (8) 「回顧と展望」の「ヨーロッパ(近代 イギリス)」(吉岡昭彦)(『史学雑誌』86巻5号、1977年)p.305。そこで紹介された木村の論文は、『西洋史研究』vol.5(1976)に掲載された。
- (9) 「回顧と展望」の「ヨーロッパ(近代 イギリス)」(福井憲彦)(『史学雑誌』89巻5号、1980年)p.338。紹介された論文は『史学雑誌』88巻1号に収録。
- (10) 「回顧と展望」の「アメリカ(北アメリカ)」(新川健三郎)(『史学雑誌』92巻5号、1983年、p.350-51)で、木村「1891年カナダ総選挙と米加通商同盟論争—カナダ経済の『アメリカ化』に関する一試論」(『研究紀要』<秋田大・教育>人文・社会31、32)を紹介。
- (11) 『北太平洋の発見—毛皮交易とアメリカ太平洋岸の分割』(山川出版社、2007年)p.204。
- (12) 木村『カナダ自治領の生成—英米両帝国下の植民地』(刀水書房、1989年)。
- (13) 大原の業績のうち、代表的なものは、大原祐子『カナダ史への道』(山川出版社、1996年)としてまとめられている。同書は木村の編集の下で出版された。

なお、日系人史を別にして、カナダ史研究に日本カナダ学会創成期か

ら関わってきたもう1人の歴史家が、仏系カナダ史研究で業績を残している竹中豊である。日本におけるカナダ史研究が、アメリカ、イギリス、フランスそれぞれへの関心から出発した3人を中心に進められてきた点は興味深い。

- (14) 『生成』 p.iii.
- (15) 木村『連邦結成 カナダの試練』(NHK ブックス、1991年) p.11 参照。
また、あとがきの最後の頁には、「日本の先駆的業績である大原さんの『カナダ現代史』(山川出版社、1981年)での連邦結成理解と、本書でのそれとの相違に驚かれる読者もおられよう」(p. 238)と記し、大原の研究との差異を強く意識していることが分かる。
- (16) Harold Innis, *The Far Trade in Canada* (New Haven: Yale University Press, 1930). ローレンシア学派については、フランシスの次の論考が参考になる。Douglas Francis, “The Writing of Canadian History: The Need for New Perspective”及び同論文の拙訳「カナダ史の方法をめぐって：新しい視角の必要性」(共に『つくばカナダ・セミナー報告集』第2号、1991年)。
- (17) 1977年11月に発行された「日本カナダ研究会のお知らせ」は、日本カナダ学会編『日本におけるカナダ研究：JACS/AJECの25年』(2004年)に再録されている。論文は、木村「カナダ経済史研究の新動向と『ナショナル・ポリシー』観の変容」(『カナダ研究年報』創刊号、1979年)。
- (18) 『生成』 p.v.
- (19) 『カナダ歴史紀行』(筑摩書房、1995年)。
- (20) 同上書、p.10.
- (21) 『カナダの地域と民族 歴史的アプローチ』はダグラス・フランシスとの共編(同文館、1993年)。『カナダの歴史 大英帝国の忠誠な長女 1713-1982』は、フィリップ・バックナー、ノーマン・ヒルマーとの共著(刀水書房、1997年)。その他、カナダ政府の助成金を得て9年間続いたつくばカナダ・セミナーとその成果報告である『つくばカナダ・セミナー報告集』(1990-98年)も、客員教員との共同作業であったし、ダグラス・ボールドウィンの書の翻訳『「赤毛のアン」の島：プリンス・エドワード島の歴史』(河出書房新社、1995年)も、原著者の筑波大学着任が契機となった。
- (22) 追悼文集の井上の文章を参照。

- (23) 木村『イギリス帝国連邦運動と自治植民地』(創文社、2001年)。他の2文献については注(4)参照。
- (24) 「回顧と展望」の「ヨーロッパ(現代 イギリス)」(後藤春美)(『史学雑誌』110巻5号、2001年) p.391、および、細川道久「〔書評〕木村和男著『イギリス帝国連邦運動と自治植民地』」(『西洋史学』201号、2001年) pp.83-88.
- (25) 『帝国連邦運動』 pp.18-19。「フェデレーション」の意味合いを持たせるべく、訳語を「帝国連合」から「帝国連邦」と改めたのである。桑原莞爾『イギリス関税改革運動の史的分析』(九州大学出版会、1999年)との視点の違いは、細川の書評でも触れられているとおり、西洋史学会の「1999年度大会共通論題報告」の討論からはっきりと読み取ることができる(「論点開示(1)『統合』か『対立』か、『連邦』対『同盟』か 大英国内の基本路線対抗を中心に(1999年度大会共通論題報告 イギリス帝国主義と世紀転換期の世界 桑原莞爾著『イギリス関税改革運動の史的分析』をめぐって〔含 討論〕」、『西洋史研究』新輯第29号、2000年)。
- (26) 『帝国連邦運動』 pp.19-20.
- (27) 細川「書評」 p.89.
- (28) 『帝国連邦運動』 p.238.
- (29) 川北・木畑編『イギリスの歴史』第4章で執筆した内容が、木村の「帝国 = コモンウェルス再編」についての基本的な見方を示してはいる。
- (30) 『カナダ歴史紀行』 p.160.
- (31) 木村「毛皮交易から生まれた『新しい民族』——カナダの混血先住民メイティの誕生——」『歴史と地理』539号(山川出版社、2000年11月) p.1.
- (32) 同上、p.12.
- (33) 木村『カヌーとビーヴァーの帝国』 p.192.
- (34) 木村『毛皮交易が創る世界』 p.219.
- (35) 木村『北太平洋の「発見」』 p.183.
- (36) 同上、pp.191-92.
- (37) 「カナダ経済史研究の新動向と『ナショナル・ポリシー』観の変容」p.30.